

資料

小児看護学教育における演習の効果に関する文献検討

Effectiveness of Exercises in Nursing Art in Pediatric Nursing Education: Literature Review

池田友美¹ Tomomi Ikeda, 鎌田佳奈美¹ Kanami Kamata, 亀田直子² Naoko Kameda

要 旨 本研究の目的は小児看護学教育の演習の効果に関する先行研究を概観することで、小児看護学教育における知識・技術・態度を培うための演習の在り方について検討することである。小児看護学の演習に関する15の文献を、演習の効果について着目し、検討した結果、小児看護学演習は「子どもとのかかわりをイメージできる演習」「対象者の視点を理解する演習」「技術習得の演習」「知識を活用して主体的に問題解決に取り組む演習」の4つの方法に分類できることがわかった。また、演習だけでは技術の習得は難しいが、演習を通して子どもと家族に対する態度の形成、学生の自主性・主体性を伸ばす効果について明らかにされていた。特に、発達段階にあわせた子どもの思いや状況を理解すること、また学生の知識・技術・態度を培うための学習法としてグループ学習を組み入れた演習は有効であると考ええる。

キーワード 小児看護学、教育、演習

I. はじめに

医療技術の急速な発展と高齢社会の進展により、より安全で質の高い看護を求める声が高まるなか、看護師一人ひとりの実践能力が求められ、我が国の看護教育の高等教育化は急加速している。

文部科学省や厚生労働省は、看護実践能力の育成・向上を主要課題にあげ、実践能力を看護技術の習得という一面だけではなく、看護実践に必要な倫理観や看護管理能力の保持、および専門職としての学習態度形成など、多面的な要素を含んだ総合能力としてとらえる考え方にシフトしている（高瀬, 2011）。この課題に取り組む方策の一つとして、ロールプレイ、模擬患者、OSCE（Objective Structured Clinical Examination）などのシミュレーションを取り入れた看護教育が活発に行われて

いる。特に、看護の統合力である看護実践能力を身につけるための教育として、演習は重要な意味をもっている。演習は臨地実習の事前準備として、できるだけ実際の対象を想定し、技術や対応を学ぶ重要な場であり、重要な教育方法であると考ええる。

しかし、小児看護学の演習においては、実際の子どもの対象とした演習が難しいため、モデル人形を用いた演習が大半であること、子どもとの接触体験が少ないため子どもとのかかわりのイメージが難しいこと、などにより教育的効果を得難い現状にある。

そこで本研究では、小児看護学教育の演習の効果に着目し、先行研究を概観することで、小児看護学教育における知識・技術・態度を培うための演習の在り方について検討する。

*1 摂南大学 看護学部 看護学科 Faculty of Nursing, Setsunan University

*2 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 Graduate School of Human Health Science Faculty of Medicine, Kyoto University

Ⅱ. 方法

1. 文献の収集方法

小児看護学教育の演習に関する文献を収集した。文献検索に用いたデータベースは、医学中央雑誌Web版 (Ver.5) であり、キーワードは「小児看護学」「演習」「評価方法」で単独もしくは組み合わせで用い、2007年以降2013年4月までに発表された原著論文を検索した。

2. 検討方法

得られた文献の演習の目的・方法・評価方法・結果を研究者間で確認し、①結果・考察に挙げられている効果を1項目ごとに抽出する、②演習の効果を方法の類似性に着目して分類、整理する、という2段階の手続きをとった。

Ⅲ. 結果

小児看護学における演習に関する文献として15文献を得た。また、これらの演習を教育の効果という視点で分類・整理した結果、大きく4つの方法に分類された。

1) 子どもとのかかわりをイメージできる演習

少子化の流れにより、子どもと触れ合う機会が少ない学生にとって、実習で実際の子どものかかわる場面をイメージすることは難しい現状にある。

伊藤他 (2012) は、学生が子どもとのかかわりをイメージできるような独自のプログラムの開発を行っている。演習を実施する各グループに、昨年、実践課題を経験した上位学年次生が2人1組でアドバイザーとして参加し、指導・評価を行う演習を実施していた。学生が受け止めたこととその気づきを分析した結果、バイタルサイン測定時の留意点や子どもとのコミュニケーションのとり方について学んでいた。上位学年次生は、実習経験に基づく子どもの特徴や動きなどの具体的な指導を行っており、実際の子どもの対応や声かけの必要性などを伝えることはできていた。しかし、上位学年次生自体が自

信をもってできる技術と捉えていない血圧測定は、具体的な助言をするまでには至っていなかった。

服部他 (2012) は、演習における学生の学びの特徴を明らかにしていた。演習は、学生がバイタルサイン測定の手順を学ぶ教員によるデモンストレーション、測定方法を身につけるための学生同士のロールプレイ、教員がバイタルサイン測定に応じてくれない患児役を演じる教員と学生によるロールプレイの3項目で構成されている。学生は技術の手技を理解するだけでなく、「測定できるような工夫をする」といった臨機応変な対応が必要であるという小児看護の特徴についても学んでいたと報告していた。

野口他 (2007) は、モデル人形を用いたバイタルサイン測定の演習のみではなく、事前に録音した実際の乳幼児の心拍音・呼吸音・血圧測定時のコロトコフ音の聞き取りを実施した。さらに、演習後に治療を受ける子どもの気持ちを理解し、協力が得られない子どもへの対応を考えるためのビデオの視聴を行っていた。学生の自己技術評価から、乳幼児の呼吸音・心音・血圧測定時のコロトコフ音については、学生が子どもの速い音・小さい音のイメージ化ができ、数の測定や音の聞き分けができるようになっていった効果があった。協力が得られない子どもへの対応を考えるためのビデオの視聴は、子どもの気持ちや人権を守ることの重要性を理解し、子どもの反応に合わせた測定方法や援助方法を選択する必要性の理解に効果があったとしている。一方で、実習時の教員による技術評価では有意に上昇している項目がなく、演習によって実際の測定場面をイメージ化できても、実際の場面 (実習場面) での技術習得には課題が残る結果であった。

2) 対象者の視点を理解する演習

兒玉他 (2009) は、模擬患者を養成する施設に母親役の模擬患者を依頼し、コミュニケーション技術の演習を行っている。演習では、学生が入院中の子どもを心配する母親 (模擬患者) とのやりとりを行う場面を設定していた。学生全員が模擬患者との対応を経験すること、また、演習後に学生の対応に対

し、模擬患者から母親の視点でのフィードバックが受けられるように工夫をしていた。学生の感想を分析した結果、「緊張する体験」「一人ひとりが体験する学び」「コミュニケーションの難しさの再確認」「観ることでの学び」「フィードバックによる気づき」という演習の効果と「2分間の限界」「実習への不安」「場面設定の改善」という演習への課題を明らかにした。模擬患者を導入した演習では、訓練された模擬患者が母親役をすることでリアリティが高まり、学生同士で演習を展開する場合よりも、より真剣に取り組むことができる。さらに、模擬患者からのフィードバックは、客観的な視点からの自己の対応の振り返りが体験できるという利点がある。コミュニケーションの難しさや緊張感は、臨地実習で体験する感覚に類似しており、実習準備として貴重な経験である。反面、緊張の高い学生にとっては実習への不安を高める危険性があることも指摘した。

幼児視野メガネを使用した子ども体験演習（高橋、2009）では、リアルな子どもの視界を体験することによる「怖さ」を実感することによって、事故に対する指導意識が高まって行くことが明らかになった。その一方で、「不慮の事故」の原因については「親に原因がある」「子ども自身に原因がある」とする解答が多く、ほとんどが個人の責任とする認識であった。

3) 技術習得の演習

「技術習得の演習」では、複数の課題や項目の設定、演習の実施時期の設定などが工夫されていた。

松井（2010）は、学内における小児看護技術演習がその後の学生の臨地実習における技術習得にどのような効果をもたらしているかを検討していた。演習は、「身体計測」「抱っこと授乳」「バイタルサイン測定」「輸液療法」「経口与薬と吸入法」「全身清拭」の6課題である。演習で看護技術が「習得できた」と回答した者と実習で経験した技術項目の関連では、「バイタルサイン測定」のみにしか有意な関連を認めなかった。演習は、子どもとのかかわりをイメージできることにとどまり、実践的な個々の技術については期待された効果がなかったとしている。

柏原他（2011）は、子どもの成長発達に応じた看護技術の提供ができるための就職に向けた準備を目的として、小児看護技術の卒業前演習を実施したことを報告している。卒業1週間前に演習を希望した6名の学生に対し、「与薬」「採血」「輸液管理」「吸入」「吸引」「経管栄養」「浣腸」「腰椎穿刺・骨髄穿刺」「事故防止」の9項目の演習を行った。卒業前演習で行った小児看護技術のなかで学生が就職後に役立つ技術として「採血」「輸液管理」「経管栄養」を挙げていた。「わからない部分もきちんと解決することができた」「今回の演習で就職前のすさまじい不安が少し減らせたと思う」「今日の演習を受けて4月までに技術の勉強や基礎の勉強をしなければいけないと感じる良いきっかけになった」等の学生の意見より、小児看護技術の卒業前演習は、学生の就職前の不安の軽減とともに学習意欲を高める効果が得られたとしている。

上山他（2009）は、小児看護学実習に事前演習を取り入れていた。「バイタルサイン測定」や「身体測定」は実習終了時の自己評価では達成できていたが、実習での体験が少ない「腰椎穿刺」や「酸素療法」については理解が十分でないため、自己学習の強化の必要性を述べている。

4) 知識を活用して主体的に問題解決に取り組む演習

学生が知識を活用して主体的に課題を達成する方法としてグループ学習を取り入れた演習が行われていた。

石館他（2011）は、「5歳児の子どもに採血を説明する紙芝居を作成する」という演習課題についてグループ学習を課し、学生にグループでの紙芝居の作成および実演発表会を行わせていた。子どもの認知発達に考慮した説明の仕方や、コミュニケーションのとり方など、講義した内容からグループでさらに学習を深め発表するといった方法である。その結果、子どもとのかかわりをイメージすることが容易に図れた、主体的な学習の醸成につながったと効果があった反面、グループ学習で学生相互の学びが強固になったが、グループワークへの参加度にはばらつきがみられたと報告している。

今西（2010）は、主体的に学ぶ意思、態度、能力である自己教育力の向上を意識し、グループ学習をとり入れた演習を行っている。演習は、グループ学習による資料作成、デモンストレーション内容の検討、デモンストレーションの実施、学生間指導によるロールプレイである。学生の自由記述の学びの内容を分析し、「（人形の）心拍がとても速かった。・・・練習が必要だ。」「身体測定の時。動かると無理と思った。放課後に練習した。」「バイタルサイン測定を実習室で友達と練習した。」「着替えの練習を先輩に見てもらった。」「いとこ（3歳）に血圧測定をさせてもらった。」「姪に臀部浴をした。」などの記述より、自己課題と技術の獲得・向上に努力する姿勢が表現されていた。このように、学生は、演習を通して自らが課題を設定し、それを達成するための行動まで示していた。演習過程における学びから新たな自己課題を明確化し、その課題達成にむけた学習行動がとれており、自発的課題は学習動機になりやすいことが示された。

江口他（2012）は、グループ学習の効果の評価のために、グループ学習前後での学生の意見交換能力を分析した。「グループメンバーとの意見交換能力に関する質問」を独自に作成し、質問用紙を点数化し因子分析を行った。「グループメンバーとの意見交換能力」は、「発言する能力」「内容を理解する能力」「意見を聞く能力」「グループ調整能力」で構成され、グループ演習後には「発言する能力」が有意に高まったことを明らかにした。一方で、意見を伝えるだけでなく、質問をしたり、意見を討議にもっていけるようなコミュニケーション、グループ調整能力の向上が今後の課題であるとしている。

谷口他（2012）は、実習で経験する頻度の高い技術項目を含んだ2つの事例を設定し、臨地実習の直前に演習を行った。事例は、感冒から哺乳不足となり、脱水の危機に対して持続点滴を実施している2か月児のバイタルサイン測定を含む観察と気管支喘息で回復期の6歳児の清拭を小児用サークルベッドで行うである。グループでそれぞれの事例に対して看護援助を考え、グループ内でロールプレイを行

い、実施後は、再度、グループで援助計画の内容や実施の状況について振り返りを行い、新たな気づきや問題を明確にしていた。技術演習後のレポートを分析した結果、小児看護学実習の直前に行われる技術演習によって、学生は看護技術ができた/できないだけでなく、子どもの特徴を踏まえて看護援助を考える必要性、親を対象とした看護援助は、親の不安の軽減だけでなく、親の育児能力が向上し子どもの健康増進に役立つという視点でも学んでいた。また、学生自身の学習者としての準備の必要性も学んでいた。このように演習での学びが看護技術の手技の確認に留まらない理由として、事例に合わせた技術の工夫、付き添う親について考える体験、振り返りによる新たな課題の明確化等が必要な知識を確認、統合することにつながったとしている。

IV. 考察

1. 小児看護学の演習の効果について

演習の効果について着目し文献を概観した結果、小児看護学演習は「子どもとのかかわりをイメージできる演習」「対象者の視点を理解する演習」「技術習得の演習」「知識を活用して主体的に問題解決に取り組む演習」の4つの方法に分類できることがわかった。

小児看護学の演習では、実際の子どもの対象とした看護技術の演習が困難なため、モデル人形が使用される。そのため、子どもの反応にあわせた看護技術の習得は難しい現状がある。できるだけ、リアルな子どもとのかかわりを提供する工夫として「子どもとのかかわりをイメージできる演習」「対象者の視点を理解する演習」が行われていた。子どもとのかかわりをイメージすることや対象者の視点に立つことは、臨床で子どもとかわるときコミュニケーションのとり方や子どもの反応にあわせることの助けにはなっていたが、それだけでは小児看護学の技術の習得にはつながっていない結果であった。しかし、子どもとのかかわりのイメージがすすむことで、子どもの理解力に応じたコミュニケーション

の取り方や子どもの気持ちの表出への援助につながる。そのことは、看護技術の習得の有無だけでなく、子どもと家族に対するかかわり方や態度の形成に役立つと考える。

小児の看護技術は基礎看護学で履修した技術を基本としているが、対象が子どもであるためにより専門的な知識や配慮を要する技術といえる（松井, 2010）。具体的には、発達段階に応じた測定器具と測定方法、測定技術、発達段階や病状を考慮した臨機応変な対応、発達に合わせたコミュニケーション技術である。柏原他（2011）の演習に見られたように、就職を意識した時期の希望者だけを対象とした演習であれば、学生の動機付けは高く効果も顕著である。しかし、従来からの方法である「技術習得の演習」は、実践的な技術の習得も十分とは言えない結果であった。

演習で示される課題に学生自身が考えて主体的に演習に取り組むという「知識を活用して主体的に問題解決に取り組む演習」では、グループ学習のスタイルが取られていた。グループ学習により、主体的な学習の醸成や課題克服に向けての自発的行動が芽生え、さらなる学習行動につながっていた。高瀬他（2011）は、実践能力とは、単に個々の技術をこなすことによって評価されるのではなく、その実践に関与した思考や判断、態度などのすべての要素を考慮すべきとしている。「知識を活用して主体的に問題解決に取り組む演習」により、学生は課題の達成だけでなく、そこに至るまでの思考や判断、態度すべてが学びになり、自主性・主体性を伸ばす結果になったと考える。小児看護学における知識・技術・態度を培うためにグループ学習による「知識を活用して主体的に問題解決に取り組む演習」は有効な教育方法であると考ええる。

しかし、グループでの学習のため、グループワークに積極的に参加できなかった学生にとっては、学びが不完全になってしまう恐れがある。グループ学習を効果的に行うためには、まず、演習課題をしっかりと意識づけさせ、学生間での目的意識を統一させる必要がある。課題達成のために動機づけが高め

られるような課題の設定の工夫、グループメンバー間の学びの不均一をどのように是正するか教員側の力量も試される。

2. これからの小児看護学における演習の在り方について

現在の大学における小児看護学教育は、看護基礎教育の平成2年と9年に行われた二度のカリキュラム改正により演習・実習時間数が改正前の半分にまで減少している（野口他, 2007）。子どもとのかかわりをイメージすることが難しく教育的効果を得難い現状の中で、今回、小児看護学の演習における教育の効果に着目した。

小児看護学の演習は、看護技術の習得にのみ結果を求めるのではなく、「子どもとのかかわりをイメージできるような演習」や「対象者の視点を理解する演習」を通して、子どもと家族に対する態度の形成、「知識を活用して主体的に問題解決に取り組む演習」により学生の自主性・主体性を伸ばす効果について、複数の文献が示されていた。発達段階にあわせた子どもの思いや状況を理解すること、また子どもの最善の利益を考え、子どもと家族が自己決定できるよう援助するための基本的な知識や態度を踏まえた技術が実践では求められており、演習を計画する上でも重要な視点である。そのような知識・技術・態度を培うための学習法としてグループ学習を取り入れた演習は有効であると考ええる。従来からの受け身の演習ではなく、自ら考えグループで意見を出し合い課題を設定することで、学生は主体的に新たな疑問や課題を設定するといった積み重ねが生まれ、さらなる学習意欲の向上が知識や技術の習得につながると考える。

V. おわりに

今回、分析対象とした15文献で行われていた演習は、子どもとのかかわりをイメージできるようなプログラムや現実体験の取り入れ、技術の習得、学生の主体性の向上等、教育者が日々の教育の中で創意

工夫している実践が報告されていた。今後は、グループ学習を取り入れた演習の課題を客観的評価で明らかにし、小児看護学教育における知識・技術・態度を培うための演習の効果について、さらなる検討をすすめる必要がある。

文献

江口実希, 小川佳代, 中澤京子 (2012): 小児看護技術演習においてグループ学習を効果的に進めるための教育方法の検討. 四国大学紀要, B (自然科学編), 34, 47-52.

服部佐知子, 谷口恵美子, 長谷川桂子, 石井康子 (2012): 「小児の観察とアセスメントの演習」での学生の学びの特徴. 岐阜県立看護大学紀要, 12 (1), 17-23.

今西誠子 (2010): 自己教育力育成と向上をめざした小児看護技術演習での学生の学びについて. 京都市立看護短期大学紀要, 35, 179-184.

石館美弥子, 沼田友見 (2011): 紙芝居づくりを取り入れた小児看護学技術演習の学習効果－採血を受ける子どものプレパレーション－. 湘南短期大学紀要, 22, 23-29.

伊藤真弓, 井上寛隆, 篠崎ひかり, 霜田敏子 (2012): 小児バイタルサイン測定演習での3年次生の指導と2年次生の受け止め方. 埼玉医科大学短期大学紀要, 23, 73-82.

柏原やすみ, 吉川未桜, 宮城由美子 (2011): 卒業前

に実施した小児看護技術の演習効果. 福岡県立大学看護学研究紀要, 9 (1), 19-24.

兒玉尚子, 納富史恵, 藤丸千尋 (2009): 小児看護学における模擬患者を活用したコミュニケーション技術演習の検討. 日本小児看護学会誌, 18 (1), 79-84.

松井由美子 (2010): 小児看護学教育における技術演習の効果. 新潟医療福祉学会誌, 9 (2), 31-38.

野口明美, 佐野明美, 服部淳子, 山口桂子 (2007): 小児看護技術教育の効果的な演習プログラムの検討 バイタルサイン測定場面のイメージ化をはかる. 日本小児看護学会誌, 16 (2), 24-32.

高橋衣 (2009): 「乳幼児期の事故防止」に関する授業の工夫とその検討 《子ども体験》演習を取り入れて. 足利短期大学研究紀要, 29 (1), 69-77.

高瀬美由紀, 寺岡幸子, 宮腰由紀子, 川田綾子 (2011): 看護実践能力に関する概念分析: 国外文献のレビューを通して. 日本看護研究学会雑誌, 34 (4), 103-107.

谷口恵美子, 石井康子, 長谷川桂子, 長谷部貴子 (2012): 小児看護学実習前に行う技術演習での学生の学び. 岐阜県立看護大学紀要, 12 (1), 33-40.

上山和子, 亦野一十三, 勘藤博世 (2009): 小児看護学実習に事前演習を取り入れた学習成果－その3－臨地実習後の自己評価からの検討と新カリキュラムへの課題. 新見公立短期大学紀要, 30, 71-77.